四日谷 敬子
Shikaya Takako

わたしのヴッパータール

《ドイツ・芸術の旅》

近代文芸社

四日谷 敬子

わたしのヴッパータール

《ドイツ・芸術の旅》

近代文芸社

〈著者紹介〉

四日谷　敬子（しかや　たかこ）
1944年　横浜に生まれる
1974年　京都大学文学研究科（哲学専攻）博士課程修了
　　京都大学博士（文学）
1980年　福井医科大学助教授
1993年　京都大学総合人間学部教授（創造行為論担当）

著　書　『ハイデッガーの思惟と芸術』世界思想社 1996
　　『感覚とロゴス.ハイデッガーのギリシア的思惟』
　　晃洋書房 2000
訳　書　『思惟とは何の謂いか』
　　（ハイデッガー全集　別巻３）創文社 1986
　　他、多数。

わたしのヴッパータール
《ドイツ・芸術の旅》

第一刷――*2000.8.20*

著　者――四日谷　敬子
発行者――福 沢　英 敏
発行所――株式会社近代文芸社
東京都文京区目白台2-13-2
TEL (03)5395-1199（編集）
(03)3942-0869（営業）
FAX (03)3943-1232
印　刷――信毎書籍印刷株式会社
製　本――小泉製本所

© Takako Shikaya 2000 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-6712-1　C 0095
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

はじめに

二年前の九月二十二日は、わたしは京都にいた。というのも、それを記憶しているわけがあるのだ。二十二日には台風が京都、大阪を直撃し、湖西線の特急・雷鳥は全面不通となり、わたしは大学の用事が済んでも、敦賀の自宅まで帰れなくなったのだ。にわかに京都に一泊して、九月二十三日午前中にやっと家へ向かったが、帰ってきてみると、庭が台風でメチャメチャにやられ、年取った母と倒れた菊を立てたり、落ち葉を掻き集めたりするのに大わらわだった。それが、もともと少し脚の不自由な母には負担だったのだろう。翌日母は、敦賀の原子力発電所を見学したあと、武生の温泉へ連れていってくれるという市の老人向けの企画に参加するとかで、近所の方と出掛けたが、前日の疲れで何となくヨロヨロする母に、わたしは厭な予感がした。そしてその日にまさかということが起こった。

昼過ぎ、突然電話が鳴った。原電の看護婦さんからで、母が見学中にコンクリートの段差に躓き、転んで、とても痛みが激しく、これから救急車で××温泉病院へ収容するが、途中家へ立ち寄ってくれるという。それでもそのときはまだ、ともかく検査をするだけなのだろうぐらいに考えていた。ところが病院でレントゲンを前に医師が言うには、「左大腿骨転子換骨折」、

手術をしてリハビリを入れると、三箇月の入院が必要とのこと、わたしは一瞬眼の前が真っ暗になった。大学は十月からいよいよまた後期の授業が始まるという矢先のことで、わたし自身はＤＡＡＤ（ドイツ学術交流会）による再招待プログラムに申請中のことだった。

それからは、わたしがこれまでに経験したことのない生活が始まった。病院ではタオルというタオルは、大きいのも小さいのも何枚でも必要だというので、それらを家中捜し回ったり、「吸い飲み」など入院中に必要なものを病院の売店で買い集めたり。幸い複雑骨折ではなかったので、九月末の手術はとても早く済んだ。だが病室に帰ってきた途端に、麻酔のせいだろう、ガタガタ震えながら、「足の先が冷たい」、「寒い」と訴える母が、とても憐れでならなかった。

九月のあいだは、わたしもまだ自由がきいた。しかし十月からは大学の勤務が始まるので、ともかく学期始めだけでもと、東京の妹に手伝いにきてもらうことにしたが、これまたクレイ・クラフトでいろいろなフラワーやアクセサリーを造る仕事が軌道に乗ってきた矢先、猫の手も借りたい忙しさの中を呼び寄せられたので、ストレスから二人で金切り声の上げどおしだった。その妹も十日ほどして帰っていくと、勤務と病院通いとの両方を、一人でこなさなければならない日々が始まった。その間も何度か台風が襲い、ふと気がついてみると、庭はまたまたメチャメチャになっていた。こうして母の入院中、否応なしに母の育てていた植物の面倒もみなければならなくなった。しかしこのにわかガーデニングがかえってよかったのだ。それまで本を読むか論文を書くかするしか能のなかったわたしも、ラナンキュラスのように、蛸の足状

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の球根はどう植えたらよいのかなどと頭をひねりながら、草花に触れる喜びと、そこから得られる心の安らぎを識ることができ、母の入院中の三箇月も、またたく間に過ぎてくれたからだ。

ドイツへの再招待の決定通知を待つという、何とも落ち着かない日々に心を紛らしてくれたのは、草花だけではない。野鳥たちがいる。それは、母が退院してきて間もない頃、年も改まって一月七日のことだったと思う。庭が雪で一面真っ白に蔽われていた。ふと見ると、縁側のすぐ目と鼻の先のもみじの木に、全体として黒っぽく、胸がごま塩の羽をした、雀よりも大きめの野鳥が、身体を羽で丸くふくらませて止まっている。ガラス戸を開けても逃げようともしない。さては草木が雪に埋もれてしまって食べ物がないのだと気づき、そおーっと庭石の雪をどけて御飯粒を置くと、わたしが戻ろうとして背を向けた途端にバサッと羽音がして、その御飯粒を食べている様子なのだ。その次の日も、またその次の日も、その野鳥は朝早くからもみじの木で待っていた。風采もよくなく、鳴き声一つ立てないので、これは鳴けない鳥なのだと勝手に合点していたが、或る日突然その鳥がピーピーピーと甲高く鳴いて、その声でわたしを朝起こすようになった。そして「おお、おお、お前鳴けるのぉ！」と声をかけるわたし目がけて飛んできて、パン切れと御飯粒をもらうようになった。かわいくて仕方なかった。それは今から思うとヒヨドリではないかと思う。

その頃、隣との境に巣を作っていた親雀が、野鳥の御飯粒やパン切れを目あてに、子雀たちを連れてきて庭へ置いていくようになった。その三匹の子雀のうち、一番上は（と勝手に思う

のだが)、どうも雌のようで、分別くさくジージーという鳴き声だった。真ん中のはとてもやんちゃな雄で、ピーピーと元気に鳴いた。ところが一番下のが、どうも小さいときに頭でも踏まれたかどうかしたのか、障害があるらしく、いつまで経ってもピーヨ、ピーヨと、まるでひよこのような鳴き声なのだ。餌の食べ方が下手で、一番大きいのを目がけるのはよいのだが、それを振り回してみたり、しごいてみたり。そうこうするうちにほかの雀に食べられてしまうのだった。それがかわいそうで、わたしはパン撒きを止められなくなった。ピーヨが大きくなるまでは面倒をみようと心に決めた。

この子雀たちは、わたしがもともと別の野鳥を目あてに餌をやっていること、自分たちはお相伴に与っていることは、ちゃんと分かっていた。それでヒヨドリが飛んでくると、また一緒にお相伴に与れるので、嬉しくて嬉しくて、ヒヨドリの回りを三匹が取り囲んで飛び回るのだ。春も本格的になって、ヒヨドリが仲間と連れだってどこかへ飛んでいってしまうと、それまで付録のようだったこの子雀たちがわたしにはかわいくて仕方がなくなった。あまりにありきたりで何の注意も払わなかった雀だが、よくよく見てみると、雀というのはかわいらしい性質の野鳥で、とても情が深いのだ。明け方から庭の木に潜んでいて、わたしが眼を覚ますのをじっと待っている。その小さな鳴き声にわたしが縁側のガラス戸をガラーッと開け、前の夜に用意しておいた御飯粒とパン切れのお皿をもって大きな椿の木の下へ向かうと、雀たちは一瞬期待でシーンとなって、わたしが餌をばら撒くのを固唾を飲んで待っている。そしてわたしが背を

向けると、仇敵の猫に用心しいしい、木蔭から木蔭へと椿の木の下へ降りる準備をし始めるのだ。そして一羽が降り立つと、次から次へと降りてくる。口にほおばって飛んでいくものもいるが、うちで生まれた三匹は、悠々と地面に降りたまま、あちらをつつき、こちらをつつきする。一面に撒いた餌はまたたく間になくなった。すると雀たちは、次の御飯時（？）まで機嫌よく庭の木々を飛び交って遊ぶのだ。

それでも親雀は子雀を連れて、どこか遠くへ飛んでいって、餌の捜し方を教えることもある様子だったが、一番下のピーヨだけはいつも巣に残っていた。一緒に飛んでいくだけの体力がないのだ。すると寂しいのか、表通りのほうへ出てはピーヨと鳴き、うちの庭のほうへ出てもピーヨと鳴きしている。そして夕方やっと兄弟や仲間が帰ってくると、嬉々として一緒に飛び交い、しばしのコミュニケーションを楽しむのだった。ピーヨが一番目がないのは餡パンである。たまに食べ残しの餡パンを細かくちぎって撒いてやると、一遍になくなってしまう。するとピーヨは石の上に載って、まず眺めているわたしのほうを向き、次に石の下へ眼を落とし、餌を捜す動作をして、一生懸命「もうないよぉ」という合図をする。そして仲間のところへ戻っていって、ジュジュ、ジュジュと鳴くのである。それはまるで、「今知らせてきたから大丈夫、大丈夫、またすぐくれるよぉ」と喜んでいるかのようだ。

しかし、この頭のあまりよくない、姿もそれほどよくない、どちらかといえば太めでヨタヨタ歩きのピーヨは、（わたしの欲目でも何でもなく）とびっきりきれいな澄んだ声の持ち主で、

この子雀が本気で鳴くときは、わたしはほんとうに鶯以上だと思う。いつまでも巣立とうともせず、ついに次の世代の子雀に混じってわたしからパン切れをもらっていたが、六月の終わり頃になると、とうとうピーヨもその美声のせいか何の苦もなく恋人を得、それからは、それまでいつもひとりぼっちだったピーヨも、いつも二匹連れで庭の近くで遊んでいた。この頃になると日は長く、大学の勤務を終えて帰ってきても、外はまだ薄明るく、わたしはまず一番先に庭へ出て「ピーヨ、ピーヨ」と呼んだ。すると二、三分ほどして、どこからともなくピーヨが庭へ帰ってきて、椿の蔭から懐かしそうにピーヨ、ピーヨと鳴き、わたしの声を聞いて安心して戻っていくのだった。それからは、どうやって分かるのか、わたしが家にいる日でも、夕方七時少し前になると、どこにいても一度庭へ戻ってきて、ピーヨ、ピーヨとわたしにサインを送る。こんなに文句なしに何（誰）かに好かれたのは、生涯初めてだった。

　こんなふうにして、結局わたしは一月初めから六月一杯は、勤務以外は、雀の世話で大わらわだった。だがそのお蔭で、もう一度渡独が叶うかどうかの通知を待つ気持ちも紛れた。そして「雀の恩返し」なのか、六月二十九日、母の入院の頃から心待ちにしていたドイツからの再招待の決定通知が届いた。本書は、二十三年振りでドイツに滞在しているあいだに、折に触れて成ったエッセイを集めたものである。

わたしのヴッパータール・目次

はじめに　1
ヴッパータールの住まいで　11
とんでもない事件　16
市民ホールでの初めてのコンサート　19
ヴッパータールのフォン・デア・ハイト美術館　25
思い出すこと　30
VRR（ライン＝ルール地方交通連合）　37
シラー劇場での『エグモント』初演　41

いくつかのコンサート　47
プラハ旅行のブッキング　51
プラハ　58
V・クレンペラーの『日記』（一九三三―四五年）　74
憧れのドレスデン　89
ルター中央教会（ウンターバルメン地区）での
　クリスマス・オラトリウム　98
ドイツの肉スープとザウアークラウト料理　104
デュッセルドルフでの「シャルダン展」　109
おわりに　115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わたしのヴッパータール

《ドイツ・芸術の旅》

ヴッパータールと
プラハでの友に捧ぐ

ヴッパータールの住まいで

十月の日曜日の静かな午後、居間の小さなバルコニーに面したドアのそばの小机で、これを書いている。朝は気持ちよく晴れていたのに、曇り、にわか雨、そしてまた晴れと、目まぐるしく変化する山地帯に特有の空模様を眺めながら。ちょっと三十分ほど、エアー・メイルを投函しに出てきたが、今はまたにわか雨だ。――

もしもこれが将来への何の見通しもない二十五年前だったら（わたしはその頃ドイツの奨学金を得て、ルール地方のボッフム大学に学んでいた）、わたしはあのミシェル・ビュトールの『時間割』という風変わりな小説の主人公のように、秋に、ルール地方に近い、にわか雨の多い街にやってきて、陰鬱な思いに打ちひしがれていたに違いない。――あの小説は、わたしが二十歳の頃、むしろサルトルの『嘔吐』を読みたくて買った一巻（中央公論社）の中に一緒に収められていたもので、わたしにはおまけのような小説だった。たしかジャック・ルヴェルという一人のフランス青年が、英国のマンチェスターを模したブレストンという町の或る商会へ就職するためにやってくるのだが、その町の工業地帯特有のどんより垂れこめる曇った空や、

ひとの気を滅入らせる雨、そして粗末な下宿とフランス人の味覚にはひどすぎる食事に打ちのめされて、自分を取りもどすために、何箇月か前に遡って日記（「時間割」）を書き始める。そして新しい下宿を捜す目的でその町をいろいろ探索するうちに、その町の旧教会のステンドグラスが、何らかの実際にあった迷宮入りの殺人事件を示唆していて、自分がそれに巻き込まれたのではないか、という疑惑を抱き始めるのである。

しかし、今のわたしは、日本の大学に籍を置いたまま、ヴッパータールでの三箇月（実質四箇月）の研究滞在に招待された身で、受け入れ教授の秘書の斡旋で、ドイツに到着した第一日目からすでに、ホテルや下宿捜しの心配もなく、直接この住まいへやってこられたのだ。それは、ツインの寝室、小バルコニー付き居間、小さなダイニング・キッチン、バス・ルーム、それに廊下や階段を含む、古い家の二階全体（正確には六七平方メートル）で、家が古いからというので、家賃は諸料金を含めて月六百マルク（電話代は別）という安さ（月額奨学金の六分の一以下）。言われたとおり、ヴッパータール中央駅からタクシーでやってきてみると、その住まいは何と、ちょっとした森の中に埋もれるように建っている古臭い住まいで、『嵐が丘』のキャサリーンなどは、こうした館に住んでいたのでは、と思われるものだった。家主のM＝P夫人は検査のため目下入院中だったが、彼女は前もってキッチンに、コーヒーや紅茶、パン、それに冷蔵庫にはバター、コーヒー用生クリーム、ハムやチーズなどを入れて置いてくれてあったし、並んで建っている母屋のほうに住む夫人の御主人で医学博士のM＝P氏と、この家に

昔から出入りしている家政婦さんが、必要なことを親切に教えてくれるのだった。そしてその翌日は、M＝P氏が自動車で近くのスーパーマーケット「買い物公園（カウフパルク）」での買い物を手伝ってくれ、また夜には、週末だけ病院から抜け出してきた夫人も一緒に、隣の「パンクーヘン・ハウス」（お好み焼きに似ている）へ招待してくれた。

ヴッパータールという町は、受け入れ教授の説明によると、ほんとうはなかったのだそうだ。それはヴッパー河をはさむ谷間で、エルバーフェルトとバルメン、それにそのほかの周辺の小さな町々を統合して、二十世紀にできた町だそうだ（現在人口三十八万人）。そのヴッパー河を利用して、モノレールが走っているのが町の顔になっている。それでは、なぜこの町にできた新しい大学は、ベルギッシェ・ウニヴェルジテート、直訳すると山大学というのだろう？そのわけは、やはり教授の説明によると、こうだ。昔この地方を征服した伯爵（エンゲルベルト・フォン・ベルク伯爵であろう）がアーヘン出身で、アーヘンは平地なので、この地の小さな山（ベルク）の上に城を建て、フォン・ベルク公と呼ばれたところから、この土地そのものが「ベルギッシュ」と呼ばれるようになり、しかもこの土地は偶然小さな山が多いので、その名が全く適合したというのだ。もちろん第二次世界大戦で町のほとんどは破壊されたが、いくつか美しい建物が残っている。例えば、十九世紀末に建てられて百年ほど経つユーゲント・シュティールの美しい「史的市民ホール」（ヒストーリッシェ・シュタットハレ）。莫大な資金を投入して修復し、ほんの三、四年前に完成、ふたたび市民に公開されるようになった。ここではきわめて

質のよいコンサートが聴ける。それに教会かと思うような美しい塔のあるエルバーフェルトの市庁舎（ラートハウス）。その地下は、アルゼンチン牛のステーキ・ハウス「マレードー」となっている。大学はほんの二十五年ほど前にできた新しい大学で、以前にわたしが学んだボッフム大学と同じくセメントの山といえばセメントの山に違いなく、ちょっと監獄かと思われるようなエレヴェーターで上り下りするのだが、それでもこのように起伏に富んだ丘の豊かな緑の中にあって、ボッフムのときほど非人間的なひどい印象は受けない。あとでお友だちになったお向かいのWさんは、やはりボッフム大学で学び、一度国家試験に落ちるという苦い経験をもっているらしいが、彼女にこの大学を案内したとき、「ここならもう一度国家試験に落ちても大丈夫」と冗談を言っていた。わたしはヴッパータールの住まいも、町も、そして人々も、ボッフムのときよりも、よほど気に入っている。

毎日夕方七時過ぎになってようやく暗くなり始めるが、その代わり朝は八時にならないと薄明るくならない。家主夫人が「庭」と称する森は、たいてい雨か霧にけむっている。それをバルコニーに面する居間のドアから眺めるのがとても好きだ。キッチンから見える高い木には、あのかわいらしいドイツの色白の雀が、多分一羽か二羽だろう、住んでいて、明け方チチチッ、チチッと目を覚ますようだ。日本のよりも声が高く、修飾音が多い。時差のせいで、夕方八時（日本の夜中三時）には眠くなり、夜中二時（日本の朝九時）に一度眼が覚める。そこで一旦起きて何かして、また眠るのだが、六時には起きる。一日がとても長く感じられる。スーパー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.